

明治33年8月

大君のみ旗のもとに身は死にて名を留めたる二百五十人
ふた月を都にありて帰らねばかごとがましき妹が文きぬ

よそながら思ひ煩ふ折しもあれ我さきがけの勝どきの声

眩まげて枕にかふる旅やどり明後日は妹が白きたたむき

すさまじきいくさのには高いびきかきてねし子は大和をのこぞ

大き弦は大砲のごと小さき弦は小砲に似たる薩摩琵琶のこゑ

乱れ髪けづらぬ我をなぐさめて誰が泣かんよ妹にあらずして

明治33年9月

いささかはなぐさめんかな日の御旗西にひがしに翻る見れば

ひと月は堪へなば堪へむ馬ほふり黒栗くふと書けるこの文

ふるさとの親の心を思ひやれば臥す身はかろし疵は何なる

聞くからに軍の庭は心づよし越後の國に馬召すと云ふ

コサツクのむくつけき子が膽ひしぎいくさの後も面立おもてたたすな

次の二首、妻まさ子の作

わが好きは世をなげく歌いたむ歌ひとのそしりはさもあらばあれ

わがせこと心あひたる歌きけばゆかしその君ををしその歌

明治33年10月

われひとり世をいきどほるこのゆふべ北に七つの星かがやきぬ

これのみは難なんうたれじと直し直し調てふひくくしぬあたら太刀の歌
わきもこをかたきにとりて芭蕉葉に歌ならひをれば日は西になりぬ

明治33年11月

腸を断たむばかりの別路よかためのかたな稚児にさづくる

我妹子に神のみ歌をうたはせてこちたき此世すまんと思ひし

明治34年1月

思ひたたばただひと日なる旅ながら人のさはりに年を隔てぬ

たかきたかき君が小琴にわれしらずわが秘め歌を誦して見しかな

我を見てやさしかりつる人ゆゑにあらぬ思の歌多くなりぬ

紺青のひかりきらめく清き國を胸にゑがきてほほゑむ夕

なにゆゑのなげきと人はあやしまむさはれ益荒男涙なきにあらず

我ひとり世をいきどほるこの夕きたに七つの星かがやきぬ

これのみは難うたれじと直し直し調ひくくなりぬあたらこの歌

明治34年2月

君ならで誰にか見せむこの巻は熱き涙を濺ぎて書きぬ

今日もまた人はばかりの歌なりぬ気遠き宮の壁に書かんか

月島の水きし骸いたみ居るかなしきの夜またあられふる

嘆きあへずそのなぐさめにかざし見る父の賜ひしこれの焼太刀

と思へば愚にもあるか世を怒る歌一つなりてまた瘦せまざる
越の海のさかまく潮に髪あらひ北吹く風に物思ふ吾

明治34年5月

歌の神理想おもいの神も寄りくらむ星のなやみの妹が玉床

清きかたなさらばかしませ世の風にあらぬ名たたば君負ひ給へ

さればとてこのちさき胸もゆる胸もだえの胸に手だにふれ見よ

紅き青きさては紫しるき糸きよきやき手にかづきて泣きぬ

三日の月われてうぶぶぬ地におちぬ世を怒る聲か世を救ふ聲か

(東洋兄の寵児を挙げたるよろこびに)

明治35年2月

終のはて百歩の畑のやかた跡ほそくも水は西へ流るる

棺おく枯野のあらし月の秋かへらぬ人のさらに悲しき

事しあらば人の國をも呑まむ胸せましやゆふべ酒にそそぐが

國瘦せて車とどむる友もなし紅葉ちりしき時雨うつ門

小屏風に妻うらわかき小酒もり今日は吹雪の日も冬至とや

明治35年3月

幾たりか世の冷たさに堪へ得たる才も無才もおなじ春の今日

えも告げぬ我がひめごとを天に問へな天はまことのあかしと説かん

初日影雪に映あるむらさきの雲よひがしへおもひをわたす

明治35年7月

閨ふかう懸けたる香のしめやかに京おもふ人を雨に宿る夜

(右は鉄幹兄のわが篆香閣に宿られし時)

いにしへに生まれず今にうたはれずわが歌あまりこの世に高き

明治35年8月

歌なりて調べむ琴の人しらず蓮のひろ葉にただ乱しかく

詩も何かこの世の我に願ひあらず亜細亜をとこの名に立たば足らむ

夏しらぬ水の里回のみつみ住み風のそよぎの歌もねたまる

野に立つは歌におごりのふたりづれ知らず米山たかき何ほど

髻わかきに我と笑まるるかくれがや小雨ひと畑黍苗うゆる

(みづから畑に立ちて)

明治35年9月

西伯利亜よりヒタラヤかけて吹く風のこのなまぐさき秋に歌なき

おほやまと耶麻土やまらきごころを放りたるこの平和に涙あらせ給へ

君が泣く戀のなみだのあつからばもぬけし國のうつろにそそげ

はばかりる人にはばかりはばかり思ひ屈しては世にはばかりる

あかる珠てる珠われに打ちつべきその人いまも尋ねわびぬる

この血いまだ染めはてぬ野の多き見ればをのこの命をしと思ふ秋
(ことし八月八日はしなくも吐血して)

ぬかたれてただに念佛す父の御墓いふことあらず否^あらず無きにあらず
(中元の夕)

明治35年10月

地を蹴りてをのこたけびの歌あげよ聲さまたげぬ大亜細亜原

天つ日にまくら高うもぬる子なしあなやさかしらかしましの國

明治36年1月

雄ごころは玉のみやこの召に往かず藁ぐつ岐蘇の秋の雲ふむ

さらさらに風のねたみの故しらず山家の秋に腕くむ我は

人しれずなげきの神の肩とらせかぎろひ暮るる秋の野に立つ

あらぬおもひあらぬ怨をなげうてばこの世の秋のすがすがとする

明治36年2月

我等ふたりことさら鎖しし柴の戸の梅のまくらに神よらすらし

わが黨^{とこ}のたかきしるしの大岩にふるらむ浪はいかが砕くる

明治36年3月

詩の神の許りも賜びにし花ぞのと越の野山にしめ結はましか

もとめ多しことしの我ぞ^つ枯らましかあたひを待ちて枯らずしもあらず
ず

相逢うてここなる人の心あらず思は高う神の世に入る

(井上秋劔と会ふ)

いさましく門出の雪にあとと残るひとりに帰さ忘るな

(秋劔を送る)

明治36年4月

時ありて城に換ふべきかがやきの眞玉いだきて闇にゆく君

髪ながう火かげにありて目はすずしねくたれ髪の妻に似し人

うす墨の妻がやさぶみ春の夜の小雨におかば消えも果つべし

なげうたば空もとどろく力ためてこの土くれにまじる玉かな

あかる玉ふるればいよよかがやきぬ地になげうちて闇やぶになむ
(只聴兄に)

夜の夢の女神に得たるきよき戀あまりに清く人知れずのみ

明治36年5月

大空をつらぬく靈の光あらば人のこころの朝と云はざれ
(白紅君に)

明治36年7月 大矢正子の歌

今の世に知られまされぬが中中に嬉しからずやますらをの君

明治36年9月

うるはしき妻が髪環に巻いて見むこがねの浪にあぶ花蔦
(金浪花といふ蔦なり)

あづまやに月は満ちたりやはらぎのくりやの妻に歌あらせばや
よろづ代を経たる甕ふるかめぬしを得て笑ふに似たる口つきもよし
(奥州の貝塚より出でし甕をえて)

明治36年10月

玉いだきて屈せよと親は笑まざらむ石を枕かむも子が願ならず
六尺の伏屋もひろき小男の闇の此世に肩せまきかな
天地を歌に泣かしし人ぞとも地にひとり我を忘るな
をごころを陰魔が宮におしよせて湧かむかぎりの血に打たむかな
まさなご世に布きませる神とりて荆棘わづらとげある縄にいましめ
もだえてはいたでにおちし鳩のごと眼するどに力をわびぬ
あえかなるなまけに燃えて羞ちらひておのれと瘦するあさがほの花
困こじては天の愛児まなごと誇るわれもいきざし荒く世を阻ふかな
天の鳥船風とぶねにうかべていざ去いなむ我には狭き大和國原
戀歌を召すな此子に道とふな道も戀路も踏むまぬ此子に

戀すとか人こそ見らめ乱れては弱手やはでこまぬく益荒夫われも

むさぼりの惑ひの面をうつすべく鏡はりしく世とも為さまし
御酒かみて神に齋いづききし興の甕しじま沈黙やぶりて火焰ほのほに投げむ

明治36年11月

皇軍をならしの原は北の國と縄もて引かせ神の代のごと
しろがねの奇しき糸もよ羅うすものの彩にほのめく玉を貫ぬかまし
世に泣かぬ男罪をのこなふさびしみか秋の女神は我を追ひましぬ
御手ふれば雲ただよひ胸うてば氷雨流す秋のおん神
そとよりて窓の芭蕉の露ふくみしのびておはす秋のおん神

明治36年12月

地を蹶くゑて阿修羅ぐるひに放らまじ我身ひとりは神の無き世を
抱きわび我は日本の魂やまとに泣くこの世虚言をぞの世わづらはし媚

明治37年1月

大御世をけがす奴の首ぬきて年の御神の轎にへたな棚におけ
いきどほり腰のつるぎを拭ふにもはたとにらまむ白き眼ぞよき

明治37年5月

破るなれば天あめなる雲もたれてきぬ神楽の庭に花ちりかかる

歌めしてはつねに賜ひしおん笑まひそれもみなさけ末の弟子われ
(以下二首故萩の家先生をしのびて)
髯をとこ能なき地のわれをだに天に愛でます人のおはする

明治37年6月

大天おおあめの神の護らすまな児とや袖にまつはる黄金糸遊こがねいとゆう
(くしき夢ありて)

ここにあまちして天路は遠し天なるや君よみちびけ地の子の我
(渡米せんとして彼國に在る相羽兄に)

君か世は海原あをきはるの國船路ゆたゆた馬つからさす

のこる子は笑みて棹さす八潮路の花にかざらむ天のおん父